オーラルヒストリー演習

平成２５年１月

山形県生涯学習センター「遊学館」

語り　　　　　　　　　寒河江　文雄

インタビュー　　　　　寒河江　惇

指導　　岐阜女子大学　久世　先生

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　齋藤　先生

　　　　　　　　　　　院生　今野　さん

＜インタビュアー＞

　今日はありがとうございます。山形県長瀞小学校の「想画」についてお話を聞きたいと思います。

　「想画とはどういうものなのか」という点と、想画を保存・活用する活動が行われていますので、その点について伺いたいと思います。

　まず「想画とはどういうものか」ということについては、一つ目、想画の特徴について、それから、長瀞小学校の想画の歴史について、この二つについてお話いただければと思います。

　まず想画の特徴といったことについてお話をお願いします。

＜寒河江文雄＞

　寒河江文雄といいます。中学校の美術教員を長い間やっていて、私の学年で（長男の惇：インタビュアーが）中学校の生徒だったんです。大学に入った時に私が股関節の病気をしていて、国分一太郎が亡くなった時に、大阪の栗岡英之助先生が全国図工研究会を大阪でやったんです。その時に、僕も体が悪かったし、東海林隆（トウカイリンタカシ）先生という国分一太郎先生の同僚であった人がメインの講師でお願いされたわけです。その二人の子守をするということで、寒河江惇が一緒に大阪に行ったんです。そういう親子以上のものがあるので、想画に関わるという、２５年位前の話なんです。

　それから国分一太郎の想画に関わった点をできるだけ拾ってやったんですが、国分一太郎はどちらかといえば図画の先生ではないんですよ。図工美術専門でなくて国語の先生で、生活綴り方運動というのが当時、昭和の初めにあったんですが、新興教育とか共産主義のかぶれがあるというので、大変批判されておったものなんですけれども、それをできるだけオブラートに包んで、長瀞全体の教育の向上のためにがんばった訳です。

　サトウフミトシというのはこういう具合に書くんです（板書で佐藤文利）。子供たちはブンリ先生と言った、渾名が。それで四番目にコクブンイチタロウ（板書で国分一太郎）。国分一太郎は綴り方、国語の先生なんです。この中にマキツネオ（板書で真木恒雄）という先生がいる。これが音楽の先生なんですね。音楽主専で手工といったんですね、手芸や工作も含めて版画を研究した先生なんです。それからもう一人は東海林隆という、この先生が古文、国語、それで奥の細道から中学校の先生になって女学校の先生で終わるんですけども、本当は元々師範学校の過程を得ないんです。この人たち（他の三人の先生）はみんな師範学校を出たけども、学校出てないんで、（国分先生と）二人とも国語の先生だから、東京から国分一太郎が来ると夜明かしで一杯飲んでいるというような（関係です）。それで、この東海林隆と私と惇が、大阪に国分一太郎の追悼の図工の研究会ということで出かけていったわけです。

　そのあたりのものは、長瀞小学校の、こういうDVD（デジタルビデオディスク）なんていうのはないし何もないんですよ。だから、普通のカメラ（銀塩カメラ）で撮ったやつのスライドというものを持って行って、その解説を僕がやらされて、機械いじりもやった覚えがあるんですが、そんなことに始まる親子関係なんです。

　それで、長瀞の想画というのは人間関係とよく密着している、教え子、恩師あるいは先生方との交流、そういうものがキチンと出来上がっている。これは何がそうさせたかというと、長瀞は日本一小さな城下町なんです。早く言うと徳川家康の十二人の子分の一番バッケ（末席）の侍が長瀞の先祖になるということで、戊辰戦争の時には官軍からやられるときに、最上川のすぐそばまで鶴岡（荘内藩）の軍隊が来ているんですけれども、それがほとんど戦争しないで終わってしまって長瀞は降参すると。その時に、僕の先祖の人が今でいうと村長ですか、町長ですか、種籾を入れておくお蔵が東西南北に四つあった訳ですよ、それに火をつけたらいかんと、、長瀞村の農民を救うためには、あなたたち（官軍）は良いんだけども、この村が潰れてしまうと、種籾だけは絶対に火をつけてならんと言ったのが僕の先祖なんですよ。私のおじいさんのおじさんにあたる人なんです。その人が長瀞小学校の一番最初の創設者で、明治六年頃に学校を開設して、山形県でも一番早い学校の創設者であった訳です。

　金はないけども志はあったという、そういうもので、それがここ（山形市緑町の山形県生涯学習センター「遊学館」）から数メートル行くと三島神社というのがあるんですが、山形県の県知事に三島県令というのがおったんです。これが酒田県令から来て、山形の県令でここに県庁があって、そして福島の県令をやって栃木県の県令をやって、鬼県令と言われたんですね。今でいうと建設大臣クラスかな。それで、自由民権を弾圧する立場から、上の方からダァーっとこうやって、道路とか何かを作るという、そういう大変面白いものと関わりがあるもので、高橋由一（画家）のことをこ存じだと思うんですが、その高橋由一が私の先祖、種籾を守ってくれた先祖の肖像画を描いているんです。その肖像画を調べたら（モデルが）亡くなって数年経ってから作品が完成しているんですよ。モデルになった、長瀞学校を開設した人（寒河江市隠）が亡くなって数年経ってから作品が出来上がっている。その写真の現像はないし、ここの美術館（山形美術館）で大々的にそれ（高橋由一の作品展）をやったんですけど、その（寒河江市隠の肖像画）版権が私の分家の家でやっていて、ここの美術館に保管をお願いしているという、そういう、小さな一万石の藩のものだけども、志が非常に高いという感じの村なんで、中学校の社会の歴史の中に長瀞の城下町の絵図が載ったことがあるんです。たった一万一千石なんです。そういうので、塾の塾長をやっておったんですが、それが長瀞小学校になったと、そういうものが想画をやったり学問をやったりするような志があったんでないかな。ちょうど今、会津の方で話題になっている、テレビでやってますね（NHK大河ドラマ）。あれと同じような形で、あの台本を書いている人が米沢出身の女の人がシナリオを書いている訳ですね。そうすると、徳川家康の系統で会津藩、米沢藩ということで来て、それで長瀞の塾の塾長さんが米沢藩で勉強した人が長瀞の代官になっているんですよ。だから、たいへん小さな長瀞なんですが、志は米沢藩なり会津藩、鶴岡などの大きな組織の中のものであって、だから、長瀞の塾なんていうのは本来であれば読み書き算盤で子供たちがギャーギャー騒いでいるようなものでなくて、今頃であれば長瀞の部落（東北地方は被差別部落の風習が薄く普通の集落を部落と呼び習わしている）に下宿をして、私宿をして、みんなでご飯を炊いて（自炊して）塾に通ったというんです。だから、今で言えばここの研究指導みたいに大学院の研修機関ぐらいな程度の高いものであるというようなことで、山形県内からもずいぶん来ておったと。それで、お寺さんであったのが神主さんになるんですが、そこの部屋の中には隣部落の寄宿生たちが下宿をした部屋の番号が今書いてあるんだなということを、その神主さんが言っておったんですが、私の家に下宿して、そして勉強したんだというような感じなんですね。そういうものがいろいろと影響されているよいうふうに思います。

　それで、想画のことですが、想画というと普通の子供たちの暮らしや農村の暮らしや郷土の生活をリアルに表現するというものだった訳です。ちょうどその頃、昭和のはじめというのは、自由画教育運動というのは山本鼎はじめ童謡作家とかいろいろなものが長野県で花咲いたんですけども、そういうものと一緒になって想画が発展してきたというふうになるわけです。自由画ができたときに、山本鼎はどういう人かというと、お父さんが漢方のお医者さんだった。それで西洋医学の免許を取って愛知県だったんだけども長野県の小さな農村の開業医になった訳です。だから長野県が文学のふるさとみたいな、山本鼎が住み着いて、隣の小学校の生徒が写生やってるとこ見て学校に乗り込んでいって、僕が審査員して展覧会やりませんかっていうようなことをやって、おせっかいをやいたのが山本鼎なんです。それが長野県で発達したわけですね。で、島崎藤村とかいろいろな人たちが文学運動と一緒になって全国に広まっていった。そういう運動のかけらというものと、想画を一生懸命やったというのは、師範学校出の先生たちが子供たちの普通の教育の中で図画工作などをどのようにやるかと、文部省の一点張り、アメリカの一点張りではダメだと、日本の地に着いたものをどうするかというような、できれば文部省に反対するような立場の小学校、中学校の先生方が一生懸命研究。その研究と自由画運動というのが、だいたい一緒になっておったんですね。その研究の中心になったのが沢柳政太郎という大先生だったんです。今、成城大学なんです、成城中学作ったから。それが文部次官やって、だいぶ文部省とケンカするんですね。東北大学などで女子を学生として入れて文部省から反対されて自分が辞めてしまったりするんですね。そういう新しい考えの持ち主だったのが、沢柳先生なんです。そこの先生のところに小学校、中学校の先生たちがみんな集まって、研究会を先生の家でさせてくれというのが想画を研究したメンバーなんです。だからほとんど同時に動いてるんですけど、大正七、八年から九年が自由画のものなんでね、ま、そんなふうな進展をやるわけです。

　それで、そこのメンバーの中の一番若手で活躍した霜田静志という先生がいるんです。この霜田静志という先生が僕の恩師なんです。この先生が多摩美術大学で心理学などをやった、英語もやってたんです。そしたら、あなたは現在の東京芸大の師範科を出ているわけですから師範学校の先生とかなんかで、熊本の女学校、新設の女学校というと授業が四時間とか六時間くらいしかないわけですよね。そこにやられた。恩師の先生としょっちゅうケンカばかりやってた。そして、お前は熊本へ行けと。そして、六時間くらいだけで月給くれないから、隣の学校の高等小学校の高等科の教員になれと、両方をかけもちやったわけです。そして自転車でガーっとこうやって、真面目な方ですから、体を壊して一年半くらいで結核になって、結核になると昔は病気治らないから退職をして、そして東京に戻ってきて、鎌倉あたりとか伊豆半島あたりの空気の良いところで静養しておって、そこで何をしたかというと英語の勉強、独学を本当にやるんですよ。そして二、三年経って英語の女学校の先生をやるんです。そこから教員やって、研究も始めるんです。こんど、外国の美術教育の先生たちのものを日本語に訳して出版するんですね。それが全部新しい教育と結びついた形で有名になって、埼玉の女子師範学校の教員になったけども、一年半位で辞めてかな、奥さん教え子をもらって、それであと沢柳先生の成城中学校の先生に。ところが成城中学校で演劇をやっておった図画の先生がね、玉川大学に行ったあの先生と一緒に自由画の研究をやっておったんです。自由画教育に反対だという霜田がね、ちょろちょろとその学校に中学校課程の美術教育を、その当時ね、図画工作といわないで美術といったんだ、そして歌唱といわないで音楽といっておったんですね、あたらしいもののこう取り寄せておった、ま、そんなことで霜田先生は月給はたくさんくれないんだけども、じゃ、曜日が空いているところに私を東大にやってくれと、東大の聴講生になるから、心理学と芸術学とあと何というので、東京大学にずっと通うんです。成城中学校の教員をやりながら、空いてるところで東大に数年通うんですね。そして、そこを出てから成城中学校にまた戻ってくるんですけども、その時には英語から心理学の先生に変わったわけです。それで、こういう話をいろいろするもんですから、抗議終わった後、長瀞の佐藤文利先生をご存知ですかと私きいたら、なんだお前どういう関係やと、どういう関係といっても佐藤文利は私のおじいさんみたいなものだと言ったら、はぁーそうかと、じゃあお前、美術教育を研究しないかと、俺はいろいろ忙しくてアレだけども何で勉強するんですかと言ったら、はがき一枚を出して、この研究会に行って来いと、お前の先輩でここで活躍した人がいるからと、それが創造主義美術教育のあれで、大学一年の時ですから、創造美育協会という学校の先生方の研究団体のところに行ったんです。これは面白かったです。ネクタイなどできないんだけども隣の部屋の人から借りてそのまま行ったらね、なんとなんともう大したもんだ。池田満寿夫って知ってますか。池田満寿夫がここにいるんだね、いやあ面白いね。池田満寿夫の作品を池田満寿夫が千円で買えという。俺のを買えって二人でケンカして友達になってね、池田満寿夫からエッチングなどの方法を教えてもらうきっかけがそこでできるんです。それは一つのアートのデモクラートという美術団体のサークルでもあったわけなんですが、そこでは想画とか自由画の戦前のそういったうねりを戦後の昭和２７、８年から３０年代まで随分活躍したわけです。

　それで、これをやっておった時に、国分一太郎と私は親戚関係があるんですよ。国分一太郎は東根の三日町なんですが、国分一太郎は小学校の教員をクビになるんですね。昭和１２年に弟が死んでしまうんです。ここのちょうど隣に三島神社ですが、そこに床屋さんの丁稚奉公にこの辺の土地柄にあった床屋さんに丁稚奉公に来て、そこに三島県令の部下であった人が来て、お前のお兄さんはなかなか頭良いんだってなというようなことで、お前も頑張れよ、というようなことで、（奉公が）明けて東根の三日町で開業して数年で、糖尿病かな、尿毒症っていうのかな、そういうのでパタッと死んでしまうんですよ。それでショックを受けるし、生活綴り方の方からは睨まれるし、学校の校長さんからも睨まれてると、そういう関係あって、作文の先生の千葉県の市川のところにある小学校の女の先生がね、東根に迎えに来て、そして精神病院に入院させるんです。そこで主治医が、ゴッホの研究をやっておった式場隆三郎という先生なんです。山下清とか特異児童の貼り絵とか絵を描くそういうものの心理的な研究をやったのが式場隆三郎なんです。式場隆三郎と国分一太郎がすぐ友達になった。主治医なんだけど。どうしてかというと、国分一太郎はせんべい布団の中に子供たちの文集と作品をたくさん布団の間に挟んで送ってやったわけです。それを国分一太郎は毎日見ておった。そしたら院長先生が来て、何だ国分君と言って、これは僕の担任の子供たちだと、そして、子供の一枚一枚の絵についての精神分析を始めるの、二人で。だから、院長室が想画の研究室になってしまった。それですぐ隣の隣というと、八幡学園なんていう山下清とかがいる附属病院がいっぱいあるわけですよ。桃のなる頃には子供たちがみな桃畑に行って桃を盗んで食べているというような話もあったりしてね、そして式場隆三郎と研究を始めるわけですね。式場隆三郎もどちらかというと大変文学者であり、音楽会のマネジメントであったり演劇とか、今えいうとそういうふうな、精神病の先生だなんていうよりも、もっと幅の広いアーティストだったんだね。そう言う人と友達になった。そして式場隆三郎のところでおさまって、お前は長瀞小学校をクビになったんだからどうする、長瀞小学校にまた戻って教員をすると、それはできないんだよと式場さんから言われて、はぁーというふうにがっかりして、東京になんとか生き残ってやろうというふうなことだったわけですね。んで、戦争がどんどんと厳しくなるもんだからどうにもしょうがない。そんなことがあって国分一太郎が式場隆三郎との接点があった。

　そう言う人間と人間との織物のような感じのする人間関係と教育というふうなことが非常に結びついているんではないかなというふうに私は感じているわけです。

＜インタビュアー＞

　想画をめぐってそういう歴史的な人間的ないろんな流れ、繋がりがあって想画が支えられてきたということになるのかと思うんですけども、後ろの壁に想画のスライドが写っていますが、そうやってできた想画の特徴　・・・

＜寒河江文雄＞

　ちょっと今の、前に戻して。

　はい、これがね、私の従兄弟なんです、相澤清美。どう感じます。これがかなり有名だったんです。僕が悪戯したんです。あの、どういう悪戯かというとね、国分一太郎の教え子の中で師範学校を出た石垣邦雄という先生がおったんです。山形師範学校を出て、小学校六年の時、私の担任だった。この先生はどういう（先生）だかというと、想画の図工の時間というと、生徒に任せた、授業を、六人位の。今度は冬景色を描くんですよと、んじゃ、冬景色、先輩の人たち、戦前の先輩の人たちを選んで、お前たちはみんなに見せて授業をやってくださいと。そして自分は生活綴り方の先生ですから、後ろの方で赤ペンでみんなにこう添削をやっていると、この先生はそういうの。で、僕たちに小学校六年生の時に教員をちゃんとやらせてくれた先生なんです。その時に僕なんか悪戯したのがこれ、同級生なんですがね、この大先輩の人たちの（作品を）入れるケースの中に、今日出来上がった作品を入れたらどうなるんだろうかと、これ、僕だけの考えでやったんですが、持って行く時にね、それを入れてしまったんです。だから石垣邦雄先生のクラスだけの優秀なものだけを二十枚くらい、勝手に入れたんです。それが僕の首を絞めるようになっていったんですね。大変なこと始まったわけです。

　どうしてそんな悪戯したかっていうと、やっぱり結果を見てみたいと、こんな長瀞のもの、伝統あるもの素晴らしいじゃないかというところにヒョコッとこう入れて、違和感が全然ない。むしろこれの方が何というか情的には非常に良いと、これが鐘なんです。カランカラーンと火の用心という、んで、これマント着てるんです。小学校六年生が、夕方から夜にかけて電柱なども、そして部落を回ってあるく、いわゆる少年団そういうものなんですね。それでその時に僕小学校の股関節脱臼の病気あるもんだから、作品を運んでくるとき非常に重かったんです。５０点の作品があった。それが重いので大変困ったなというので、これは老人であっても子供であっても、もっと作品を少なくして軽々と整理整頓しなくてはダメなんだろうなと、そういうふうなことを気づいたのが小学校六年生なんです。

　それを学校教員退職してボランティアでやった時にそれを実施したのが、ちょうど、あ、そうか、惇の子供が赤ちゃんで、僕が仕事をやっている時にここにねんねしているという、そういう時に、軽くしないとこれは将来老人クラブの人たちも運んだり子供運んだりするのはダメなんだなというふうなことを非常に感じたのが小学校六年生なの。その時の作品がね、国分一太郎が長瀞小学校の体育館で錦を飾った作文の会のメインの講師になってくるわけです。その時に、ずうっとこう国分一太郎の実績だというので作品が並ぶ。そうすると、石垣邦雄の作品と国分一太郎が教えたものと一緒にここに展示なっている。それ、みんな気がつかないわけです。僕だけが知っている秘密だったわけ。で、僕が学校の教員になって数年経って、あぁ、こりゃダメだなというので、気づいて胸が締め付けられてね。

＜インタビュアー＞

　犯人だから分かることですね。

＜寒河江文雄＞

　犯人だから。あとはみんな誰もわからない。僕だけがわかる。

　ハーっと、僕が学校の教員でやっと出張にしてもらって出てきたけども、胸が痛いわけですよ。それでやっぱりボランティアとして何とか想画のものとの関わりが密接になってくるというふうなことができたわけですよ。そういう、いつでもね、石垣邦雄の教え子と国分一太郎の教え子たちと一緒に展示されて、あなたたちの寒河江さんのがあるよと、こうみんなが言うわけ、学校の先生たちでね、そして、こちらの方もそうだと。んで、その年齢差なんていうのは全然誰も気がつかないというふうな中で、僕はボランティアでこれを整理しなくてならないなあというふうなことを思ってやったのが、想画との関わりなんです。

で、想画とは何かというと、長瀞の子供たちの暮らしの様子を描く、で、これ、戦争の真っ只中ですから、軍人さんを日の丸の旗でお送りするなんていうこともあったんですけども、それは名簿から外されてるんです。教科書の墨塗りってあったんですね。墨塗りやったのが、これ、私の恩師の井上庫太郎というのがいる。これは佐藤文利の教え子、小学校の時。で、これの父親がね、井上庫八という自由画の長瀞小学校で研究やってる。んで、教え子が寒河江と言われる。その時にね、井上庫八ってなのは、うちの親父が担任で最もおっかないという人だったわけです。井上庫太郎は東京の美術学校に入って、というふうな感じで頑張ったんですがね、ま、ここの師範学校を出て教員をやったと。で、井上庫太郎は長瀞小学校の想画を守ってくれた先生なんですよ。んで、これ、ほとんど知られていないんです。昭和二十？あれ、終戦はいつだっけ。

＜インタビュアー＞

　二十年敗戦です。

＜寒河江文雄＞

　昭和二十年、あぁ、んだな。二十年の九月に戦争教材の廃棄処分というようなことがあったんです。靖国神社の掛図を、さ、グラウンドに持ってきて火をつけて焼きましょうというふうな、そういう運動があったわけですよ。ちょうど明治維新の時の廃仏毀釈令（神仏判然令を契機とした廃仏毀釈運動）というのと同じ。で、全国津々浦々の戦前の子供たちの絵が一緒に積まれて火をつけられたから、想画というのはなくなってしまった。

＜インタビュアー＞

　戦前の三大想画学校といわれた・・・

＜寒河江文雄＞

　うん、そういうのは若干あったわけだけども、まず、ほとんどなくなってしまったわけです。

　それで、井上庫太郎という人がね、井上庫太郎の恩師が佐藤文利なんですが、これは大先輩たちの佐藤文利先生やら国分先生たちが頑張って残してくれたものなんだから、戦争に関わりないからこれはとっておこう、あ、んじゃ、これもとっておこう、これもとっておこうというので、一つ一つ選って、戦争のものは、こちらの方にちゃんと、そして校長先生の検閲を受けて燃やすものと残すものとの区分けしたのが井上庫太郎なんです。だから、そういう真面目にやったなんていうのは、普通はどこでも、どこの役所でもなんでも三月の転勤期になれば全部廃品回収に持って行ったり、火を・・・ゴミとしてするのが普通なんだよね。そういうのから救ってくれたのが井上庫太郎なんです。それで、進駐軍に名簿にちゃんとこう戦争にあるとこは墨塗りしてて、そういうのがあるんですよ。だから、宝物なんですね。だから作品が良いとか悪いとかいうのでなくて、もう完全に、あ、（資料を出し）井上庫太郎が墨塗りした名簿、これは戦争のもの、創立記念日、シャボン玉なんていうのはちゃんと残しておいて、あとのところはこう（墨塗り）。ま、こういうようなものがあって、井上庫太郎は戦前の想画を大事にとっておったわけですね。ま、井上庫太郎も石垣邦雄も大先輩たちの教え子になるわけですから、そういう人間関係の綾のようなものが長瀞小学校に延々とつながっているという感じがするんですね。

　ま、そういうのが、全国からみれば長瀞は大したことないんです。本当言うとやっぱり関西、えー、あのー、想画のふるさとというので、三月にね、研究会あるんですが、島根大学だかであるんです。島根の青木さんという人が山の中で八岐大蛇のところの山村の生活と子供たちを描いた作品が残っているんです。それから、三重県の伊勢市で中西良男さんという、これはね、お医者さんの今でいうと大学かな、医科専門学校を卒業して、そして、結核になってブラブラっておって、近所の校長さんから小学校にアルバイト来いと言われて教員やって、そのまま図画の教員になってしまったという中西良男という人がいる。この二人はお互いに交流があって関西地区でたいへん頑張っておった花形の人なんです。んで、あと優秀な学校というのはいっぱいあるんですが、ま、特に国分一太郎などが教育活動、評論活動などでやって時々きかれたところで、自分は長瀞にいるときに図画工作の研究やったんだなんていうふうな自慢は決してしなかったんだけども、そういうことを胸に秘めて研究をやっておった人なんです。ま、だから、想画というのは子供たちのこういうもので、長瀞では戦争のものは全部はじいた形でやってると、だから、ある東京の先生は長瀞の図画の作品は戦争反対にする反戦の兆しが全然ないな、不思議だなと、こういうようなことを言っているわけです。で、そういうのもないし、自由画というものとのくっつき合いも、国分一太郎と佐藤文利は主義主張合わないからしょっちゅうケンカをやったなんていうのでなくて、いつも佐藤文利さんの全国展覧会で名簿整理する、あるいは名前を書く、そういったことを国分一太郎さんと二人で「ひっぱりうどん」を食べながら学校の宿直室で、・・・「ひっぱりうどん」って知ってる？（知らないとの答えあり）、そうめん、うどん。乾麺を鍋でやって、納豆をかき回して・・・今は納豆、あのあたりは納豆で食べてるかなあ。佐藤文利と国分一太郎はね、これは納豆とうどんというのは合わないと、ていうふうなことを文章で書いているんです。どうして合わないかというとね、赤ちゃんのおしめの匂いがするというんですよ。で、昔は納豆菌なんて使わないで藁から納豆菌をしたから不完全なままでするもんだからね、だから赤ちゃんのおしめの匂いすんのが半分位だったわけですね。ま、こんなのが歴史と私が関わってきた想画の（話）なんです。

　ちょっと休憩しますか。

＜インタビュアー＞

　想画っていうのがどういうものなのか、ということと、想画を保存・活用する活動について、まとめてお話くださったということでよろしいでしょうか。

　まず一旦、ありがとうございます。